

連載 アメリカ経済史に学ぶ

第8回 米国の職人社会が教えてくれること

明治大学政治経済学部
専任講師・博士（経済学）
下斗米 秀之

新しい時代の到来を予感させる新元号「令和」が発表された4月1日、平成最後の新年度が始まった。私事ではあるが、今年度より母校明治大学に奉職することとなり、10数年ぶりに入学式に出席した。入学式で土屋学長は、人工知能の発達など複雑化する社会において、新しい価値を創造する姿勢の重要性を説き、入学者たちにエールを送った。

人工知能が爆発的に進化

いまや我々の日常生活にAIや人工知能などの新技術は深く浸透し、その恩恵を受けている。この先、人工知能が爆発的な進化を遂げ、「人間を超える知性」の実現を予見する識者も少なくない。しかし利益を得る人ばかりとは限らない。

振り返ってみると、資本主義国家はかつて、それまでの職人社会から近代工業と科学の発展に伴う大きな社会変化を経験した。その際、産業革命が始まったイギリスでは、機械は労働者に失業をもたらす「敵」とみなされた。そこで職人たちは「械打ちこわし運動」を展開した。

産業革命で労働需要が変容

この背景には、機械に雇用を奪われたという直接的な動機のほかに、産業革命に伴う労働力需要のあり方の変容、機械に対する人々の無理解と偏見も存在した（注1）。世界中でみられる最近の移民排斥に関する議論と通じるものがある。

しかし、概してそうした反応は一時的なものとなった。機械打ちこわし運動も1810年代をピークに衰え、機械化は抵抗しがたい時代の流れとなった。

機械化が米国経済を支えた

むしろアメリカでは労働節約的機械が、腕利きの労働者がもっと仕事ができるようになる手段とみなされた。機械は現存する熟練を排除するものとして機能したのではなく、機械の専門化とメカニクスの万能性がアメリカ経済を支え、大量生産体制を準備した（注2）。

機械化によって熟練労働者が排除された、と単純に理解することも正確ではない。19世紀末のアメリカの工場で熟練労働者は、量・質ともになお優勢を維持し、工場の運営に主導権を行使した。職人社会が長年培ってきた労働観、価値観は簡単に捨て去られるものではないのだ。

連載 アメリカ経済史に学ぶ

第8回 米国の職人社会が教えてくれること

ヨーロッパの技術情報を活用

アメリカには外来の技術や技能に対して、広範な知識と製造・適応能力を独自に新しく身につける伝統がしみ込んでいた。ヨーロッパからの技術情報は、自由に偏見なく活用され、アメリカの経営風土のなかで生まれ変わり、独自の生産システムを育てた。改良好きのアメリカン・メカニクスの努力がアメリカを技術先進国にしたのだ。

新しい技術に対してネガティブに反応し、不安を煽ることは健全ではない。アメリカ職人の歴史は、そうした反応を乗り越えてしなやかに適応する人間の強さを教えてくれる。

— 以上 —

(注1) 堺憲一『あなたが歴史と出会うとき—経済の視点から』名古屋大学出版会、2009年

(注2) 森杲『アメリカ職人の仕事史—マス・プロダクションへの軌跡』中公新書、1996年